

第3分科会

「シニアの地域社会活動の推進」

東日本大震災の被災地では、高齢の方が様々な場面で活躍しています。本分科会では、被災地でのシニアによる地域支え合い活動についてお話を伺った上で、地域社会の生活環境づくりや地域包括支援活動へのシニアの参画について、議論します。

第1テーマ「震災で学ぶ（被災地でのシニアの活動）」

■コーディネーター

吉田 成良

高連協専務理事、エイジング総合研究センター専務理事

■パネリスト

高橋 仁

仙台市健康福祉局部長、前地域活動推進課長

上原 喜光

全国介護者支援協議会会長

清水 福子

あかねグループ理事



〔はじめに／分科会の趣旨説明〕

吉田：第1テーマのコーディネーターを務める吉田です。第3分科会は、2部構成になっており、第1テーマでは「震災で学ぶ（被災地でのシニアの活動）」と題して、今回の震災・被災地においてシニアの社会的活動がどのように行われたか、ということを紹介していただきます。お集まりいただいたパネラーのみなさんは、被災地で実際に活動された方々です。

最初に、仙台市役所の高橋さんに、仙台の被災状況を含めて話していただきます。実は本日、仙台市では、東北の夏祭りを集めた六魂祭が開かれているのですが、高橋さんもその準備でお忙しい中、参加していただきました。ありがとうございます。

〔各パネリストからの報告〕

◆高橋 仁（仙台市健康福祉局部長、前地域活動推進課長）

○震災当時の仙台市

仙台市健康福祉局保険高齢部からまいりました、高橋です。みなさんもメディアなどを通じてご存知かとは思いますが、仙台市の震災による被害を説明しておきます。仙台市は東西に長く、東は太平洋に面しており、西は山形県との県境まで延びています。3月11日の地震では、津波によって沿岸部がやられ、4月7日の地震では、丘陵部が地割れなどの被害を受けました。

今回問題となったのは時間帯です。3月11日の地震は平日の午後2時46分でしたから、お勤めの方はみんな会社に行っていました。津波でやられた沿岸部というのは、一部工場などもありますが、主に居宅のある場所で、被害を受けたのは家にいて逃げなかったか、逃げ遅れた方々です。昔ながらの家があり、高齢者の方も数多くいました。

一方4月7日の地震は深夜に起きました。私はすぐに役所に向かったのですが、小さなお子さんをつれた人たちが避難所に向けて歩いているのを多数目撃しました。このように地震とはいっても起きた時間帯によって、避難者の種別や状況が大きく変わってきます。

また3月11日は大学受験もあり、受験に来て被災されたという方もいましたし、JRも駅を閉鎖していたので、行き場を失った旅行者も避難所にやってきました。深夜でしたが一部帰宅途中のサラリーマンなどもおり、駅周辺の避難所はさまざまな人が集まっていました。東京でも発生しましたが帰宅困難者の対応というのも大きな課題として残りました。仙台市の避難者の推移は次のようになります。

避難者の推移

3月12日	258カ所	105,947人
3月19日	141カ所	13,991人

5月24日	19カ所	1,703人
7月8日	9カ所	295人

地震の翌日には10万人以上の避難者が発生しました。避難者のタイプは大きく3種類に分けることができると思います。

①帰宅困難者

先ほどもいいましたが、会社帰りや旅行先で被災した人たちです。

②津波被害に遭った方

津波で自宅が破壊され、帰る家がない人たちです。

③一時的に避難した人たち

地震で危険を感じて、避難してきた人たちです。

従来一般的な地震では③のタイプが多かったのですが、今回の地震では①②の避難者が多かったのが特徴といえます。

○地域の主役はシニア

次に地震後の状況を説明します。水道、ガス、電気といったインフラ、さらに交通機関がストップして身動きがとれなくなりました。さらに携帯もつながりにくく、なかなか安否確認ができなくて不安が増大しました。これが一時的なものであればしのげるのですが、長期化したため、さまざまな困難が生じました。

今回一番きつかったのは、ガソリン、灯油といった燃料不足です。港がやられたということもありますが、ガソリンを運ぶタンクローリーまで波にさらわれてしまい、燃料を配ってまわる足が止まってしまったのです。この日は雪が降って非常に寒く灯油不足は大変な問題でしたし、生活の中心ともいえる車が使えないのは非常に不便でした。

また、交通がストップするということは流通にも影響します。いつも開いているはずコンビニが閉まり、開店できた店も棚に物があまり無いという状況でした。これはあとで笑い話になったのですが、ある雑誌を定期購読している人のところに、5月号が届いたあとで4月号が届くといったこともありました。そのぐらい流通は混乱していたのです。

このように物流が麻痺していますから、店には物資が満身に届きません。さらに緊急時になると水や食料を買いだめする人もおり、品不足に拍車をかけました。そうした中で、水や食料を入手できなかったのが高齢者です。品不足になると、限られた品を求めて多くの人が店頭で並びます。しかし高齢者は、体力的に長時間並ぶことができないため、食料や水の購入をあきらめてしまうのです。また、マンションなどではエレベーターが止まってしまいうため、階段を使えない高齢者は、外出自体が困難になるということもあります。今まで独りでもなんとかやっていた、とがんばっていたお年寄りたちも、今回は厳しかったようです。

ではこうした状況の中で、シニアがどのような活動をしたか、お話ししたいと思います。私たちが一番ありがたかったのが、町内会・自治会の役員さんたちです。町内会や自治会は、全国的に後継者がおらず困っている、という話を聞きます。仙台も同様に、ヴェテランの方が多いのですが、今回はそのヴェテランの方たちが大活躍してくれました。町内会や自治会といった、地縁で結ばれたメンバーが、安否確認や生存に必要なものを届ける、といった支援活動を行ってくれたのです。さらに「どこどこで困っている人がいる」「なにになにが必要」といった話を行政につないでくれました。シニアの役員さんたちは、支援の担い手である地域包括支援センターや民生委員、地区社協、ボランティアといった人たちと連携しながら、地域を支えてくれたのです。

ここ数年いろいろなところで、地域のコミュニティが希薄化してきた、という意見を耳にします。地域の行事への参加が減少した、あるいは行事自体の存続が難しい、といった話も聞きます。価値観の多様化にともない、お祭りや運動会といった、娯楽性の高い地域の行事は敬遠されるようになりました。現代は、地域で楽しまなくても、自分にあったレジャーがたくさんあるからです。

それでも今回コミュニティが機能したのは、「震災のような大災害の場合は助け合いましょう」という意識が働いたからだと思います。そして地域のつながりや支え合いといったものが、まだまだ生きていることを認識できました。行政としてもこういった部分は継承していかなければ、と感じています。ただ、神戸市でも震災の後はコミュニティが活性化しました。ところが時間とともに薄れていった、という話も聞いております。

以上を踏まえて、どうすれば地域の中で安心して暮らしていけるか、を考えていかなければなりません。地域の主役は、そこに住んでいる人たちです。冒頭でも言いましたが、平日の日中の住宅地においては、シニアの人たちが、地域の主な構成員となります。災害発生時には、シニアが知識と経験を活かして地域を運営していく場面も出てくるでしょう。今後はどのようにすればシニアが活動しやすい環境を作ることができるのか、そういったことも考えて行きたいと思っています。

吉田：どうもありがとうございました。では続きまして清水さんお願いします。清水さんは仙台市のボランティア団体で配食活動をしています。今回は、震災当時の様子や活動の状況などを報告していただきます。

◆清水 福子（あかねグループ理事）

○あかねグループについて

みなさん、こんにちは。仙台市若林区に拠点を置く特定非営利活動法人あかねグループで配食事業責任者をしている、清水と申します。このたびは大震災に際しまして、みなさまからご支援をいただいた事を大変うれしく思っております。絆の強さや暖かさを感じた日々でした。みなさま本当にありがとうございました。

さて、あかねグループについてですが、女性の自立と社会参加、福祉の街づくりをめざして29年前にスタートしました。誰もがいつまでも住み慣れた地域で暮らし続けるために、配食事業や訪問介護サービス、生涯学習の場の提供といった活動を続けています。

運営費は会員の支払う会費と寄付によってまかなわれており、現在会員数は正会員91名、準会員4名、利用会員が226名となっています。

○震災直後の活動

3月11日の地震が起きたとき、私は事務所2階にいました。慌てて配食サービスの準備をしている厨房に行き、避難するように言いました。激しい揺れによって調理器具が散乱し、3つあった炊飯器も床に落ちていました。また、大型冷蔵庫や調理台といったものまでが移動する激しい揺れで、何かにつかまっていけないと立ってられない状態でした。そんな恐怖の中、スタッフは盛りつけ済みのお弁当を落ちないように、必死に守ろうとしていました。

揺れが収まった後、床に落ちたお弁当をどうやって作り直そうか、ということになりました。私たちは大雪でも台風でも常に弁当を作り続け、配食を休んだことがありません。ですから、地震の後も何とか配食するのが当然だと思っていました。しかし厨房の中は調理器具が散乱しており、お弁当を作れる状態ではありません。そこでコンビニへ買い出しに行ってもらったのですが、コンビニも物がありませんでした。

そんなときスタッフが、「卓上コンロが家にあるからもってくる」と言い、すぐに2台のコンロが集まりました。それでなんとか当日の配食分のお弁当149個分を作ることができました。

そして3時過ぎに配達を担当しているカーボランティアの方たちが集まってきました。このとき初めて「渋滞がひどい」「電柱が曲がっている」といった外の情報を知りました。そんな状況でしたが、とにかく配達するしかないということで、4時には出発しました。私も配達に出たのですが渋滞で車は動かず、停電であたりが真っ暗だったのを覚えています。ライトでお届け先の玄関を照らしながら配食してまわりました。停電しているためエレベーターが使えず、11階まで歩いて登ったものの、お届け先が留守だった、という配達者もいました。いつもなら1時間半ぐらいで完了する配達ですが、この日は最後の車が戻ってきたのが7時40分でした。

配食の完了を確認してマンションの5階にある自宅へ戻ってみると、すべてのものが崩れ落ちてぐしゃぐしゃの状態でした。靴を脱いで上がれる状態ではなかったため、毛布だけ持ち出してその日から一週間ほど避難所で生活しました。避難先は小学校の体育館だったのですが、雪が降っていたので寒さに震えながら夜を過ごしました。また、東北一帯の惨状をラジオで聞き、本当に不安な気持ちになりました。

翌日、スタッフはあかねに集合しました。スタッフもみんな被災しているにもかかわらず、避難所から駆けつけてくれました。なにもできない状態であるのは分かっていたのですが、なにかをしたい、という思いが強く、若林区の区役所に行ってガスボンベを貸してくれないかと頼みました。ガスがあれば調理ができると思ったからです。ところが、区役

所のほうも震災直後のパニックで対応できる状態にはなく、なんの返事ももらえませんでした。

仕方がないので再びあかねに戻り、スタッフと相談し、その日は休むということになりました。私たちが食事を届けている人は、毎日の配食を必要としている人ばかりですので、なんとか届けたい、という気持ちはあったのですが、震災の翌日だけはやむを得ず休みました。さらにその翌日、3月13日、スタッフが集まって、何かできることがあるのではないか、と厨房に入りました。何かを届けたい、という思いをスタッフ全員が抱いていました。冷蔵庫を見ると、焼きそばがありましたので調理し、そのほか残っていた果物や豆腐をセットにして配食の準備をしました。

そのとき、スタッフのひとりが「炭があるので一斗缶があればご飯が炊けるよね」と言いました。すると別のスタッフが「家にかりんとうを入れていた一斗缶がある」と答え、それでご飯を炊こう、ということになりました。これが午前中の講演で樋口さんが紹介してくださった「一斗缶」の始まりです。一斗缶を入手できたので、私たちは慣れない手つきで炭火をおこしました。しかし炭おこしというのは本当に大変で、なかなかうまくいきません。経験がないため最初は、缶に穴を開けるということすら知りませんでした。それでもなんとか穴を開け、炭をおこすことに成功し、ご飯を炊きました。

配食の弁当はできましたが、それ以外にも問題が山積していました。全員分の弁当はないので誰を優先するのか、また交通が麻痺しているなか誰が配達するのか。会員で話し合っ、ひとつひとつ解決していきました。

弁当ができた頃、タイミングよくカーボランティアのみなさんが集まってきてくれました。しかしガソリンが入手できなくなっていたため、車を動かせません。そこで自転車による配達をお願いすることにしました。大変な作業ですが、みなさん快く引き受けてくださいました。車での配達時は二人態勢でしたので、カーボランティアは運転のみを担当し、弁当を直接手渡すということはありませんでした。そこで、配達のマニュアルを説明するところから始めました。

カーボランティアのみなさんは、おにぎりを自転車の荷台に積み、1時間半か2時間ほどかけて、ひとりで7~8キロの距離を走ってくれました。それを30日間続けてくれたのです。体力勝負の配食を無事故で走りきってくれたことに感謝しています。

また、カーボランティアは車の運転だけではなく、グリーンサポートといって、庭の草むしりや剪定なども行っています。

このように、あかねグループの会員はみんな元気で、積極的に活動を続けています。あかね以外の場所でボランティアを掛け持ちしている人もいますし、震災直後にはボランティアセンターで活動をしている人もいました。また、会員同士でパソコン教室や編み物教室を開いて楽しんでいる人もいます。

厨房で活動しているボランティアさんの中には、手作り料理の良さを若い世代に伝えたい、ということで、親子料理教室を開いた人もいます。ちなみに、メニューはずんだ餅など、仙台の郷土料理でした。

あかねグループは、「出会い」「ふれあい」「学び合い」「支え合い」をモットーに歩み続けて29年になります。平均年齢は64歳になりましたが、会員はみんな元気です。いざという時に、自分たちがもっている力、知恵、積み重ねてきた経験を活かす場面があると思っています。今回の震災では、人のやさしさ、思いやりにふれることができ、助け合う中で各方面と協力態勢を作ることができました。ボランティア活動を通して自分のもっている能力を発揮することが、いきいきとした豊かな人生につながる、と思っています。

吉田：ありがとうございます。配付資料に道で豚汁を配っている写真がありますが、これは無料だったのですか？

清水：はい、無料で配りました。前々から決めていたわけではなく、冷蔵庫にあるもので何かを作らなければ、という状況で作ったものです。最初はみなさん遠慮して寄ってこなかったのですが、会員が食べてみせると、集まってくれました。

吉田：雪も降っていましたが、食べた人はうれしかったでしょう。

それでは引き続き上原さんよろしくお願ひします。上原さんは全国介護者支援協議会の会長で震災の後、東京からボランティアとして被災地に入られました。

◆上原 喜光（全国介護者支援協議会会長）

○被災地におけるボランティア

全国介護者支援協議会の上原です。介護をしている人を支援していこう、という団体です。介護者が少しでも楽になるように、介護情報を提供するなど、さまざまな支援活動を行っています。今回の東日本大震災では、当協議会も支援活動を行っています。

今回は、被災地におけるボランティア活動についてお話ししたいと思います。私の前に話された高橋さんや清水さんは、仙台で被災された現地の方です。一方、私は東京で支援物資を集めてボランティアとして被災地に入りました。何回か現地に入っているのですが、その中から見えてきたものがあります。それは、現地に入っているシニアのボランティアが少ない、ということです。全国各地から東北へボランティアが集まっているのですが、遠方からのシニアの参加が、悲しいぐらいに少なかったのです。

ちょうど私は団塊の世代の一番上にあたるのですが、昭和22年から24年生まれの人口は、720～30万人と言われていています。職人さんや自営業以外の勤め人は、みんな定年を迎えている世代です。ところが東北のボランティアの現場では、団塊の世代の影が、まったくといってよいほど見えませんでした。

南三陸、気仙沼、石巻とまわってきましたが、若い人たちは本当にがんばっています。20代、30代が多く、会社に休暇届を出してきた、という熱心な人もいました。ただ、みなさん若く、熱意はあるものの、ボランティア文化が身につけていないのです。

ある若者は、食料も何も持たずにいきなり被災地に入ってきました。コンビニは開いていませんから何も買えず、結局避難所に並んで食料をもらっていました。そんなことでは駄目ですよ、とアナウンスされると、今度は弁当やテントは持参してきます。しかし言われたことをやっているだけでは被災地のためにはなりません。

これは南三陸町の話なのですが、避難所の近くにボランティアの受付所があり、多くの若者が集まっていました。ご飯やテントを持参して働いています。ところが避難所の高齢者から、トイレに並ぶ人が多くて入れない、という苦情が出ました。大量のボランティアがトイレを使うと、肝心の避難民がトイレを使えないのです。ボランティアというのはありがたい迷惑にならないことが大切なのですが、若者はなかなかそこまで気が回らないのです。

そんなとき、経験のある団塊の世代が、アドバイスしてあげればうまくいくのにな、と思いました。あるいは団塊の世代がボランティアのノウハウを勉強して、指導できるようになっておけば、東北の被災地でも役に立てるし、来るべき関東の地震でも指導的な役割を果たせると思います。

被災地を訪れて感じるのは、東北人は我慢づよいということです。ボウフラが湧いているような仮設住宅でも文句を言わず、逆に「屋根のある所に住ませてくれてありがとう」と言います。そんな状況ですから、なんとか協力してあげたいのですが、ノウハウがなければなかなかうまくいきません。うちの全介協も、練馬区の光が丘団地で支援物資を集めました。すると毛布やタオルが大量に集まりましたが、まったく整理がついていません。本来、「〇〇が必要だから集めましょう」、「〇〇へ送るから集めましょう」ということでなければいけません。しかしみんな集めたことで満足してしまっているのです。

そこで南三陸町に電話してみると、「いりません」という答えが返ってきました。本当は物資を必要としているのですが、全国から支援物資を大量に送りつけられて、整理がつかなくなっていたのです。物資があっても整理する人間がいない、配る人間がいないというのが現実なのです。練馬で集めた支援物資も黙って送りつけてしまえば、体育館に積まれてじゃまになるだけです。電話でどうすればよいか問い合わせたところ、「施設名を言うので、そこで配ってください」と言われました。

物資は配るところまでやらないと意味がありません。そこでトラックを仕立て、スタッフを集めて特養などの施設をまわりました。みなさんも物資を送るような機会があれば、誰が受け取って誰が配るのか、そこまで考えるようにしてみてください。

○シニアの地域社会活動

次に、第3分科会のテーマであるシニアの地域社会活動について、お話ししたいと思います。東北のように戸建ての多いところでは、地域のコミュニティがまだまだ残っています。しかし東京では、地域の中核を担う町内会そのものが機能していません。

私のいる練馬区の光が丘団地には約3万人の住人がおり、46棟の建物ごとに自治会があります。自治会の役員は団塊の世代の人が多数を占めています。そこではお祭りやイベン

トなど、さまざまな行事を提案しているのですが、なぜか自治会で話し合われた内容が住人に伝わっていきません。子供の頃のクラス委員を思い出してみてください。大体勉強のできる子と人気のある子が委員長になっていたのではないのでしょうか。私のいた東京ではそうでした。団地の自治会の役員も同じです。ほとんどがサラリーマン、それも上場企業を定年退職したような人ばかりです。それと女性の役員は目立ちたがりで、なんでもやってくれるようなタイプの人がイニシアチブをとるようになります。

そうすると、一般の人たちは参加しにくくなります。役員は上から目線だけでものを言うのではなく、一緒になって盛り上げていこう、という姿勢が大切になります。

地域活動に関していえば、女性のほうが熱心なような気がします。団塊の世代の男性はどこに行ってしまったのでしょうか。実は光が丘団地で面白い話を聞きました。団地の前に「光が丘」という地下鉄の駅があるのですが、朝の8時半頃に人出がピークを迎えます。9時始業だとすれば、少し遅い時間帯です。実はこの人出の正体は、団塊の世代の男性でした。朝、駅の売店で新聞を買い、10時頃まで公園のベンチに座っているそうです。

一方の女性はどうしているのか。団地内にあるファーストフード店にたむろしてコミュニケーションをとっています。そこでさまざまな情報交換をして連帯感を高めています。これからシニアの社会活動を引っ張っていくのは、女性ではないでしょうか。

しかし女性ばかり頼っているようでもいけません。地域活動を盛り上げるためには、団塊の世代の男性をどうにかして引っ張り出さなければならないのです。

吉田：お疲れのところありがとうございます。このフォーラムの十年來のテーマも団塊の世代をいかにして引っ張り出すか、ということにあります。団塊の世代が地域社会でどんなかわりをもっていけるのか？ それは第2テーマである地域包括支援センターにもつながっていくと思います。

〔質疑応答〕

質問者1：清水さんに質問です。あかねグループでは会員は会費を払って活動をしているということですが、活動は無償で行っているのですか？

清水：あかねで会員になるということは、あかねで活動してその対価を得るということです。よって配食の有償ボランティアは1時間450円の活動費を得ています。それからカーボランティアさんは昼食の配達は件数が少ないので1回来ていただいて700円、夕食は900円の車代を支払っています。あとヘルパーについては国の基準に従って活動費を払っています。

吉田：ありがとうございました。それでは第2部にうつりたいと思います。